

A氏は、午前1時台に胸部付近が苦しい旨、午前5時台にトイレに行きたい旨を訴え、それぞれ看守勤務者を呼び出した。午前1時台に、看守勤務者1名が、仰向けの状態のA氏の両手を引いてA氏の上体を起こそうとした際、A氏に対し、「(体を)起こして。重たい。」などと発言したことがあった。

A氏が車椅子に乗る際、看守勤務者2名がA氏の両脇に腕を通して抱きかかえたが、A氏の体を支えきれず、A氏を車椅子の前の床に下ろした。その後、看守勤務者4名が毛布を担架のようにしてA氏の体を持ち上げて一旦ベッド上に戻し、看守勤務者3名が、それぞれA氏の腰部、腹部、両脇を持って体を持ち上げ、車椅子に乗せた。

A氏は、午後3時台から、臨床心理士によるカウンセリングを受けた(通訳あり。)

その後、午後5時台から、A氏は、看護師によるリハビリテーションで、マッサージなどを受けた(別紙6)。A氏は、手掌を自己の意思で開閉することはできたが、看護師により手足等を動かされた際には痛みを訴えた。また、A氏は、看護師に対し、臨床心理士に話ができたと述べ、翌日の外部医療機関(精神科)における診療の際、医師に話したいことなどを看護師と確認した。A氏は、頭の中が電気工事をしているみたいに騒がしい、耳の奥で波の音がして聞こえづらい、目がぼんやりしている、食事が少ししか食べられない、もう死んでもよいと思うときがあるといったことを話したい旨を述べた。途中、看護師は、A氏の唇が乾燥しているのに気づき、A氏の唇にクリームを塗った。看護師は、自身が作成するメモに、「毎日ごく軽度ずつではあるが、意欲が増えてきている。」などと記載した⁶²。

午後7時台、ベッド上で座位となっていたA氏を仰向けに寝かせるため、看守勤務者1名がA氏の腰等を支え、もう1名が背もたれの買い物かごを移動させた際、看守勤務者1名が「重いよ。」などと発言したことがあった⁶³。

⁶² A氏が膀胱炎だったのではないかとの指摘がされたことがあるところ、調査チームの調査で、3月3日のリハビリテーションの際に、看護師が、A氏に対し、以前に膀胱炎になったことがあるかを尋ねていたことが判明した。看護師は、調査チームの聴取に対し、A氏の尿回数が少なく膀胱炎になる可能性があると考え質問したものであり、A氏は、膀胱炎になったことはないと答えた旨を述べている。

⁶³ その他、3月2日から同月3日にかけて、看守勤務者がA氏の体勢を変えようと